

ニュー・トラディショナル

NEW TRADITIONAL : 障害のある人の表現と伝統工芸の 相互発展

主催：文化庁・一般財団法人たんぼぼの家

＊令和元年度 文化庁委託事業

「障害者による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）」

実施期間：2019年5月～2020年3月

／目次／

1. 事業概要 …p2

2. 実施内容 …p4

- 2.1 有識者、実践者による議論の場の設定
- 2.2 日本各地での福祉×伝統工芸の活動の調査
- 2.3 手しごとに触れ交流する機会の創出
- 2.4 実例づくり
- 2.5 事例を紹介する展覧会等の開催
- 2.6 報告書やウェブサイトでの発信

3. 今後に向けた展開と課題 …p47

4. メディア掲載履歴 …p48

1. 事業概要

主催：文化庁、一般財団法人たんぼぼの家

事業名：NEW TRADITIONAL：障害のある人の表現と伝統工芸の相互発展

*令和元年度 文化庁委託事業「障害者による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）」

実施期間：2019年5月27日(月)～2020年3月31日(火)

実施主体：一般財団法人たんぼぼの家（奈良市六条西3-25-4）

趣旨：

NEW TRADITIONALは、障害のある人のものづくりと伝統工芸の相互発展をめざすプロジェクトである。つくり手、つかい手、つたえ手が交流し、ものをおして新しい生活文化を提案する。国内での福祉×伝統工芸の活動調査や、デザイナーや研究者、ギャラリーのオーナーやものづくりのコーディネーターにかかわる人などによる議論の場づくり、福祉施設と伝統工芸のものづくりの実践などに取り組んだ。

現在、障害のある人がはたらくうえでの課題として、賃金が低く仕事の選択肢が少ないといったことがある。いっぽうで伝統工芸の世界では、価値観の多様化にともない、製品に対するニーズが低くなり後継者不足や発信（販売）先の見直しを余儀なくされるなどの課題がある。これらの課題を創造的に解決することをめざし、未来に向けて3つの目標を立てている。

【ものをおして生活を豊かにする】

ものと人の関係すなわち、つくり方、つかい方、つたえ方を見直し、豊かな生活を考える機会を増やす。

【障害のある人たちとあたらしい仕事をつくる】

障害のある人や、自分の能力を発揮する場が限られていた人たちが、技術や感性をものづくりにいかす状況をつくり、自分の仕事に誇りをもつ社会をつくる。

【つくり手たちが相互に学び合う場をつくる】

分野を横断し、つくり手が交流し、異なる文化、分野、手法からあたらしいものづくりのヒントを得られる環境をつくる。

本プロジェクトをGood Job!プロジェクト※がめざす、福祉と新しいものづくり、仕事づくりが出会う場づくりの展開として位置付け、具体的に6事項を実施した。

① 有識者、実践者による議論の場の設定

時期 2019年6月

場所 Good Job!センター香芝（奈良県香芝市下田西2丁目8-1）

② 日本各地での福祉×伝統工芸の活動の調査

時期 2019年6月～2020年3月

調査先 全国9カ所（福祉×伝統工芸）+東北地方3カ所（伝統工芸）

③ 手しごとにふれ交流する機会の創出

時期 2019年10月

場所 奈良県葛城市

④ 実例づくり

時期 2019年7月～2020年3月

場所 奈良、福岡、山形で5事例

⑤ 事例を紹介する展覧会等の開催

時期 2020年3月

場所 東京都内1カ所（※新型コロナウイルス 感染拡大防止のため中止）、奈良県内2カ所、山形県内1カ所

⑥ 報告書やウェブサイトでの発信

無料配布小冊子…2020年6月発行（1,000部）

ウェブサイト…2020年6月公開

※ Good Job!プロジェクト

一般財団法人たんぼぼの家が2012年より行っている、障害のある人と協働し、アート・デザイン・ビジネス・福祉の分野を超えて、新たな”しごと”はたらしき方”の仕組みをつくる試み。2012年度、障害のある人の表現から生まれた魅力的なプロダクトを紹介する展覧会「Good Job!」を大阪で初めて開催。2013年度から「Good Job! 展」として、障害のある人との協働による新たなしごと・はたらしき方を紹介している。これまでに北海道・宮城・東京・愛知・大阪・兵庫・福岡・大分など全国で開催している。世にひろめるべき取り組みを発見・発信することを目的とした「Good Job! Award」、そして2016年には新しいしごとをつくりだす実践的・実験的な拠点「Good Job! センター」を奈良県香芝市にオープン。福祉の垣根を超えて、異分野と連携し、既成の労働観を変革することをめざしている。

Good Job! プロジェクト goodjobproject.com

Good Job!センター香芝の取り組み goodjobcenter.com

2. 実施内容

2.1.有識者、実践者による議論の場の設定

2.1.1.有識者会議

日本の工芸の動向や、障害のある人のものづくりに詳しい有識者を招き、国内における工芸の現状や、先駆的な事例、彼らの活動の理念などを聞き取り、調査に向けての助言をあおいだ。障害のある人が伝統工芸に関わっている事例のうち、すでに流通している商品を数点会場に用意し、資料とした。

障害のある人の就労に関する課題を振り返ったうえで、製品化のみならず、本事業における「伝統工芸」「障害のある人」の定義づけ、ケアする人の労働環境や地域の関わり方、商品の価格設定、稼いだお金の使い方で、総合的なデザインについて考慮すべきという意見に至った。製品化に際しては、視覚的／文化的／機能的要素を補完しあえる生産地と取り組むことや、識者の指導、テクノロジーの介入、個性を反映させる仕組みづくりなどが必要と思われる。

- ・日程 2019年6月19日(水)
- ・会場 Good Job! センター香芝（奈良県香芝市）
- ・有識者

氏名	所属	期待した視点
加藤駿介	NOTA&design 代表	信楽焼と現代的なプロダクトデザインの融合の実践
白水高広	株式会社うなぎの寝床 代表	福岡・八女を拠点とした地域文化産業の実践
水野大二郎	京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授	デザインリサーチとインクルーシブデザインの実践
守屋里依	ippo-plus/無由	工芸を生活に届けるための実践

・同席者：多田智美（MUESUM 代表／編集者）、寺川真弓（染織家）、長岡綾子（デザイナー）、播磨靖夫（一般財団法人たんぼぼの家 理事長）、原田祐馬（UMA/design farm 代表／デザイナー）、一般財団法人たんぼぼの家 職員、Good Job! センター香芝 職員

【活動紹介】

加藤駿介（NOTA&design 代表）

滋賀・信楽を拠点にデザイン業とショップの運営をとおして、信楽焼と現代的なプロダクトデザインの融合の実践と作り手の応援をしている。近隣の障害者施設「信楽青年寮」に関わっており、特徴的なプロダクトは製造のアドバイスと販売も手掛けている（例：紐状の陶を組み合わせで作られた器など）。

白水高広（株式会社うなぎの寝床 代表）

福岡・八女の「うなぎの寝床」を拠点に地域文化商社として活動をしている。代表的な商品は「現代風もんぺ」。「もんぺ」をフォーマットとして産地や素材、技法を伝えて

いく活動をしている。地域のものづくりを伝えるアンテナショップから全国各地の文化を比較できるリファレンスショップへ展開している。

守屋里依（ippo plus/無由）

大阪で工芸を生活に届けるための実践をしている。自宅とマンションの一室をリノベーションしたギャラリーで展覧会やお茶の催しなどを行っている。「美意識が世界を平和にする」という信念のもと、それに共鳴する人たちとの出会いを広げている。

水野大二郎（京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab特任教授）

もともとファッションデザインの領域で研究、実践を開始。デザインリサーチの視点から、デザインの設計方法論へ、2010年からはデジタルファブリケーションの研究へと展開。かつて、神奈川の福祉施設を紹介するツールを学生とともに制作した。デザインに関わる人たちの視野や裾野を広げる取り組みをしている。

【意見交換】

・ものづくりにトレーサビリティ（追跡可能性）を意識的に組み込むことにより、伝統工芸とのコラボレーションが可能。例えば、八女は提灯の産地だが、障害のある人の絵画を提灯に描く、という時に、製造元がわからない商品をネットで購入するよりは、製造者や工程までわかる八女の提灯と組み合わせることで価値を上げることができる。商品へのタグづけ（誰がどう携わったかの証）も大事。たとえば、エイブルアート・カンパニーで障害のある人のアートを靴下の柄にしている、という商品も、OEMととらえるか、奈良の伝統産業とのコラボとして捉えるかで、伝わり方が変わってくる（白水）

・ものづくりをする上で、視覚的要素、文化的要素、機能的要素の3バランスを重視する。たとえばTシャツは、機能的要素がはっきりしているが、そこに視覚的要素を加えることで魅力が増している→今後の活動調査・商品調査でも活用できる（白水）

・「それが〇〇焼かどうか」といったような、産地／ブランド信仰でなく、そのものの美しさを見極める目が大切。また、どの点に専門的な見識を入れるか。例えば、現在ショップで扱っている信楽青年寮の陶器は、底面の釉薬がけの面積をアドバイスしている。現場と対話しながら、どの工程に障害のある人が関わるかを見極めていく必要がある（加藤）

・現在、伝統工芸がデジタルファブリケーションに興味を示していないということは、こちらから提案するチャンスがあるということ。「グッドジョブ はりこ」は3Dプリンタを活用するなど、張り子の進化系として先駆的といえる（加藤）

・（前述のトレーサビリティの話を受け）どの工程に障害のある人が関わるかを、どう伝えるのが魅力につながるのか検討する（参考として『エバーレイ』など、追跡可能性の高いブラインドのウェブサイトの紹介）。地域に根ざした加工方法も、情報（コンピュータ）を介して誰にでもできるように見えるようにはなっているが、実際は異なっている。職員の個性、利用者の個性、デザイナーの個性が反映されており、それらが生きる環境づくりが大切である（水野）

・一般的に成功しているに見える作業所がどのように運営されているのか、そのリサーチも重要と思われる。その調査の際、利用者だけでなく、職員が享受したものについても聞きだしてみてもどうか。漠然と稼ぎたい、仕事をつくりたい、だけでなく、実際にどれだけの金額が就労者に払われればいいのか。分析想定する姿勢も大事。稼いだお金の使い方（楽しみ方）を知ったり、人との繋がる機会を設けることも必要（水野）

・プレゼンテーションにより価格設定を高くすることの重要性。利用者・職員双方の誇りにつながる（守屋）

・ものが人を幸せにしている実感があると、作家の創造性が上がるのでは（守屋）

・過度な利用者優先の風潮もある。支援する職員の就労環境や、文化的な経験を増やすことも大事。一石を投じる発想が必要（水野）

・ Good Job!センターと絹づくりの工程を体験している。工芸のものづくりは素材と向き合う時間。素材から引き出せる共通の体験が、障害のある人とその環境との壁をうすくするのではないか。繭から糸をひくときも、あらゆる感覚がはたらき生きる勇気がわいてくる。そういった考え方、情報を発信することも大切（寺川）

・デザイナーとして、自分のデザインしたものを製品化する過程で障害のある人に関わってもらっている（奈良の地場産業の靴下製造で出る端材をつかい、アップサイクル製品として販売）。発注側として、作業にそれぞれの人の個性が反映されているということを感じた（長岡）

・ものが容易に手に入る時代だからこそ考えるべきことがある。理念として伝えるのではなく、美しいものを愛でる文化を共有しながら、自分自身やまわりの環境を変えていくというような、人々のライフスタイルを変える提案をしたい。伝統工芸には「愛と祈り」という普遍的なテーマがある。地域の中に、ものづくりを核に障害のある人もふくめた共同体をつくるという発想が大切だ（播磨）



2.1.2.有識者への聞き取り

現代の工芸の現場でコンサルティングや作り手、使い手、伝え手をつなぐ活動をしている永田宙郷氏に、伝統工芸の意味やものの伝え方、市場開拓、具体的に協働できそうな団体などについて聞き取った。

- ・日程 2019年6月25日(火)
- ・会場 Good Job! センター香芝（奈良県香芝市）
- ・有識者 永田宙郷（合同会社 ててて協働組合 共同代表／プランニングディレクター）

《聞き取った視点や助言の抜粋》

・永田氏が考える、工芸を構成する要素

マテリアル（素材）、テクニック（技術、道具）、スピリッツ（思い、こだわり）、レイヤー（歴史を重ねた風土）。特にレイヤーが、工芸ならではの要素。人間の営みだけでは変えられないもの。ものづくりをすべてゼロから更新するのではなく、これらの要素のどれかを変えることで、あたらしいものづくりの可能性がみえてくる

・伝統工芸そのものの定義や現状

伝承工芸、美術工芸、生活工芸、産業工芸、手工芸、伝統工芸など。従来の縦割りのものづくりでは生き残れないのが現状。和菓子の世界でもあえて駄菓子をベースに味を追求したり、漆工芸の技法でも歯医者用のシリコンを使って雌型をつくるなど、他分野の技術を応用している。また、陶芸（京焼）と竹細工を組み合わせた花瓶など、手間も工法も素材も異なるもののマッチングによるあたらしい工芸が生まれている

・工芸の価値、技術を残すことまで考える

「日本刀」の事例。日本刀を作るには、19の工芸が組み合わさっている。いい仕事、いいものを残すことをめざし価格設定すると1本で3,600万円ほどになるが、それを購入する顧客層もある。その仕事があることで、それぞれの職人が継続して仕事を続け、技術を継承していくことができる。

・ものの届け方（売り方）の提案

2万円の器を受注したとする。その際、ものを売るだけでなくもっと考えられることがある。例えば、届けるまでに2年待ってもらう。その間、5万円の奈良旅行や3,000円の杉の香りチップを販売促進し、トータル15万円支払ってもらうような届け方だってある。先に資金が入るのでいい素材が買えて、また良いものづくりにつながられる。

・ものづくりと時間

伝統的な素材や工法は時間がかかるものが多い。たとえば本事業のように1年単位で成果を出そうとすると、できることは限られてくる。また、それぞれの産業によって繁忙期が違うので、時期によってはコラボレーションができる余裕がないこともある

ほか、本事業で実現できそうな事例のコラボレーションについて、地域や会社名、職人などを具体的に紹介いただいた。今後の活動の参考とした。

2.2.日本各地での福祉×伝統工芸の活動の調査

伝統工芸が盛んな地域において、障害のある人の表現と伝統工芸がすでに出会っている（実際に製品開発や販売を進めている）施設や団体に訪問し現状と課題を伺った。障害のある人のものづくりの関わりや、製品がどのような人たちにつかわれ、製品をとおしてどのようなコミュニケーションが生まれているかを聞き取った。ものをつくるだけでなく、つたえる（見せる、売る）こと、つかうことのつながりや環境をつくる意識、伝統や技術を引き継ぐだけでなく、今の生活や文化に合わせものづくりを更新していくことも大事な視点であることを発見した。

調査先：全国12カ所（福祉×伝統工芸9カ所、伝統工芸3カ所）

- ・紅型（沖縄） あいライク
- ・銀細工（沖縄） トウムヌイ福祉会
- ・織り・染め・加工（東京） La Mano
- ・赤間石アクセサリー（山口） 愛工房
- ・竹・紙細工（鹿児島） ワークプレイスハイホー
- ・栽培・糸紡ぎ・染め・織り・加工（鳥取） おりもんや
- ・和ろうそく（京都） 中村ローソク
- ・東北の郷土玩具 福島・秋田・山形の3カ所

以下の2カ所はインタビューを行った。

- ・漆器、木工、陶芸ほか（鹿児島） 工房しょうぶ
- ・伝福連携（京都） 京都市保健福祉局

調査者：大井卓也、岡部太郎、後安美紀、是永ゆうこ、中島香織（以上 一般財団法人たんぼぼの家）、中塚翔子、藤井克英、三輪竜郎、森下静香（以上 Good Job! センター香芝）、守屋里依

2.2.1.銀細工（沖縄） トウムヌイ福祉会

調査先 社会福祉法人トウムヌイ福祉会
沖縄県糸満市西崎町4丁目20番地5 tumunui.jp
回答者 喜納平（理事長）
調査日 2019年6月4日(火)
調査者 岡部

○施設および就労に関する情報

従事する利用者 5～6名（年度ごとに少し変わる）

福祉サービス種別 法人としては生活介護、就労継続支援B型、就労移行支援。琉翼は就労継続支援B型

従事する職員 1名

○製造工程や環境づくり

ブランド名 琉翼（りゅうい）

商品名 「房指輪」

商品種別 シルバーアクセサリー

活動年数 2015年～

年間生産量 房指輪フルセットを製造する場合1ヶ月に1個

販売価格 房指輪56,160円 ネックレス12,960円

販売先、卸先 直売およびインターネット販売、口コミ

商品の特徴 障害のある人が丁寧に造形した銀細工

・なぜ伝統工芸を仕事に取り入れているのか、そのきっかけ

トウムヌイ福祉会では、これまで主にパンの販売を行っていた。パンは日持ちしない上に単価も低く、同業者の増加に伴い、将来性と差別化の困難さがあった。そんなとき、利用者が紙粘土を用いて創作に没頭する姿を目にし、粘土という低単価のものではなく、銀という高単価の素材に変えて、彼らの個性を生かし、マイスターとして誇りのもてる仕事と考えたときに沖縄伝統工芸の銀細工と出会った。銀は素材自体に価値があるため、商品が売れなくても換金できたり、端材や失敗作も再度溶かして使用できるため、素材の効率がよい。また、価値のある素材に触れることで、自然と利用者や職員のプライドも高まってくる。加工にかかる時間に対するの価値づけが大事だと思っている。

・オリジナル商品のどの部分を伝統工芸と言っているのか

房指輪は、琉球王朝時代から女性が嫁ぐときに婚礼の品として使用されていたもの。7つのチャームそれぞれに意味がある。また、銀細工も伝統工芸のひとつ。

・地域の伝統産業との関わりはあるのか（組合や保存会等）

ブランドスタートにあたって、沖縄県工芸振興センターの金細工課程に3名の職員を派遣し専門的に技術を学ぶ機会をつくった。工芸振興センターは沖縄の伝統工芸継承のための人材育成課程があり、試験に合格した人を対象に無償で3ヶ月もしくは6ヶ月の研修をおこなっている（現在はこの課程はないらしい）。房指輪は沖縄各地で工芸作家が自由に取り組んでおり、認可制ではない。

・利用者が製造に関わる際に工夫している点

銀細工は素材も高価なので、まずは銅板で試して慣れてから、本製作に入るようになっている。作業を細分化して、利用者の得意な部分をいかしながら作業をするようこころがけている。

・活動をとおしたコミュニケーション、コミュニティのあり方

取材は琉翼だけでなく、法人全体に対する問い合わせが多い。ウェブメディアなどからの取材はある。

いまのところあまり広く広報はしていない。一つひとつの製造に時間がかかるので、口コミの受注で手一杯という状態。

○ 課題と感じていること

人材育成。前述した3名の職員は、技術を身につけて琉翼の事業を立ち上げた後、しばらくして退職してしまい、とても残念だった。ただ、技術と経験は内部に溜まっていくので、現在は振興センターで研修を受けていない職員がマネジメントできている。

ブランド立ち上げ当初に、工芸振興センターの職員から「製品に使っていいよ」と口頭です承されたデザインを型紙として使っていたら、あとあとでやはりNGと言われた。現在は内部職員が作成した意匠で製造しており、問題は解決している。

どうしても単価が高くなるので、7つのチャームを自由に組み合わせてカスタムすることができるネックレスなど、比較的安価な商品もつくっている。

○ 今後の展開

素材を金にしたいが、柔らかく加工しにくいので、まだ手が出せていない。



2.2.2.織り・染め・加工（東京）La Mano

調査先 クラフト工房 La Mano
東京都町田市金井5-14-18 www.la-mano.jp

回答者 高野賢二

調査日 2019年8月8日(木)

調査者 中塚、藤井、森下、守屋

○施設および就労に関する情報

従事する利用者 27名

福祉サービス種別 就労継続支援B型

従事する職員 15人

○製造工程や環境づくり

商品種別 こいのぼり、てぬぐい、織り物

代表的な商品

内容 : La Mano型染鯉のぼり5点セット

販売価格 : 39,000円(税抜き)、桐箱付き・45,000円(税抜き)

販売実績 : 2019年・270セット、2020年・300セット(見込み)

商品の特徴 草木染・織り・染織で使用する植物や綿の栽培を施設内で行っている

・なぜものづくりを障害のある人の仕事に取り入れているのか

前身は、障害児の造形教室。そこを卒業した人がはたらく場として1992年に設立された。

スペイン語で「手」という意味をもつ「La Mano」を名称にしたのは、手仕事を中心にしていくという思いから。

La Manoの商品やものづくりを、応援してくれたり待っていてくれる人がいる。ものづくりや表現活動を通して、人と人が繋がり、こころ豊かな生活、社会にしていきたい。

利用者の収入を上げながら、自己実現や社会参加を促していくことを、つねに考えている。

・どのような体制でものづくりをしているのか

まず企画、生産、販売として、ものづくりの3つの循環を考えている。

企画の部分では、職員がかわるが、まず自分たちの強みを探り、知る。自分たちになにができてどんな可能性があるのか。

利用者が大きく関わるのは、生産の部分になるが、たくさんの作業があるため、工程分解していく。

スタッフは専門的なことを学んだスタッフもいれば、そうではないスタッフもいて、個の力を集団の力に変えて取り組んでいる。

年2回の展示会を施設内で開催。4日間で約500名の来場者があり、約300万円の売り上げ。

販売可能な商品はつねに500万円分くらいを保管している。

・代表商品である鯉のぼりについて

藍染の手ぬぐいの販売がふるわず、解決策を考えていた。もともと施設で型染もしており、藍染で型染の鯉のぼりがあったら、面白いかもしれない、と思いついた。はじめは遊びで15匹くらい作ったが、それが人気だったので、本格的に生産することになった。購入された人がSNSで発信するなどして、それぞれの想いや物語があると感じる。子どもの成長とともに経年変化していったり。La Manoの鯉のぼりから、それぞれの鯉のぼりになって時を刻んでいるのだと感じる。

・ほかの業者との関わりはあるのか

静岡の下駄屋さんに、La Manoの手ぬぐいを使っていただいて鼻緒にしてもらった。自分たちだけでなく、外のメーカーと協働しながら、幅の広いものづくりを意識している。

・利用者が製造に関わる際に工夫している点

もともと草木染もやっていたので、草木染のスカーフを作りつつ、それを鯉のぼりの吹き流しにしたり、はぎれは、鯉のぼりの矢車に使ったり。利用者の得意なことをフル活用して、出来る部分、専門的に必要なところ、そういったものを組み分けし作業をしている。

作業ごとに、利益が高かったり、低かったり。また利用者の仕事として、仕事率が高い、低いといった分類をしながら、総合的なものづくりを考えている。

こういった商品をつくりたいというゴールがある場合と、利用者のやりたいことから商品を考えていく場合とふた通りのパターンでやっている。

つくりたい商品がある場合は、まずスタッフが一通りの工程をやったうえで、この部分はこの人ができるのではとか、こういう工夫をすればできるのでは、と考えていく。スタッフが真綿の紡ぎをやっていた時に、利用者が自分もやってみたいと言ってやってみてもらったら、簡単にできた。じゃあそれを活かして、何か商品ができないかということもあった。

藍染のチーム、草木染めのチーム、織りのチーム、といったように特化することで技術やクオリティは上がるが、毎日ひたすらやっているとモチベーションも下がる。たまには別のこともしてもらったりなど、ちょっとした変化をつけながら製作のモチベーションを保てるようにしている。たくさん作ることだけが目的ではないので、はたらく人たちの意欲とか、そこではたらくことが楽しいと思ってもらえることを大事にしている。

・活動をとおしたコミュニケーション、コミュニティのあり方

染料になる玉ねぎの皮をたくさんの方が集めてくださったり、材料を材料屋に買いに行くこともある。商品の縫製は町田市内の福祉施設に外注しており、ボランティアが制作に関わることも。メンバーやスタッフだけでなく、さまざまな人が関わっていて、その関係性のなかで商品が出来上がっている。

○課題と感ずること

ありがたいことに、鯉のぼりが毎年全て完売してしまい、ニーズに追いついていない。施設を新たに整備し作業環境を改善しながら、より多く作れるように考えている。やみくもに数を増やしていけばいいということではなく、作り手の利用者があることなので、大きな負荷がかからないくらい緩やかに数が増えていけば。



2.2.3.赤間石アクセサリー（山口）愛工房

調査先 合同会社あいびい 愛工房
山口県宇部市黒石北四丁目1番22号

回答者 清水愛美（代表）

調査日 2019年8月24日(土)

調査者 後安、藤井

○施設および就労に関する情報

従事する利用者 6名。硯磨きとしてハローワークで募集。石を磨けるのは4名。他2名は内職

福祉サービス種別 就労継続支援A型

団体外の関係者 日枝陽一（作硯家）

※日枝さんには、伝統的工芸品である赤間硯の作り方や清水さんの仕事のサポート内容について、別途、自宅工房に趣き、話を伺った。 調査日：2019年8月25日(日)

清水さんが以前勤務していた下関市の事業所で、赤間石を使っていた。赤間石の魅力に気づき、自分で作ってみて売れるかどうかということを試すために、福岡県から山口県宇部市に移住し、A型事業所を立ち上げた。宇部市には、清水さんの師匠である、赤間硯の作家、日枝陽一さんがいる。石の磨き方を習得するまでに時間がかかる。これがおちついて来て、赤間石の存在が皆に知れ渡れば、伝統工芸というものも息を吹き返すかも知れないと清水さんは考えている。立ち上げはスムーズだった。師匠である職人しか知らない状態で宇部にやってきたのだが、ハローワークに求人を出すと、利用者さんは集まった。しかし、そこから市場開拓するのが大変だった。硯を磨くのも難しいし、立ち上げるまでは師匠のもとに通い、磨きの仕事をやって、ようやく利用者さんに教えていけるようなレベルにやっとなってきたかなと清水さんは思っている。今収入は外に出ている人の分で賄い、赤間石アクセサリー部門を補っている状態。

○製造工程や環境づくり

商品種別 赤間硯の制作過程で生じる破片を用いたアクセサリー、染物

活動年数 2018年～

販売価格 アクセサリー3,300円～、赤間石染マスク880円～

販売先、卸先 インターネット販売（<https://aiabee0418.thebase.in/>）

商品の特徴 全て一点物

赤間石はそのままだと風化するため、防止目的で漆を塗る。原石が水に濡れた時の赤間石の色つやを、漆（無色）で覆うことで閉じ込める。漆は職員が今のところ対応硯が作られる工程を利用者やお客さんなどたくさんの人に知ってもらいたいせつなことだと思うので、同じように手作業でやっている。事業所が使える石は硯の端材。全部手作業で砥石で形を整えてペーパーで3段使いで磨いて仕上げる。

機材…サンドブラスト、カッターマシン（ブラスト用の絵を出すため）

利用者が自分で形を考えてつくっていく。利用者に対しこの形にしてくれということがない。煮詰まってくると、ブラストを使って、絵柄をいれてみようとか。そういう刺激を創作工程を入れながら続けている。

全て1点もの。同じものを沢山作ってくれてというのは難しい。

・アクセサリーとしての工夫

磨き上げて絵を描いて見ようとか、塗ってみようとか。重すぎるとやはり肩がこったり耳が痛くなったりするので、サイズ感も気にしながら。

一部にスワロフスキーのパールを使っている。価格の面でも合わないので淡水真珠は使えない。

赤でなく緑石もある。硯には堅すぎたり柔らかすぎたりして向かない。

組み合わせるのにワイヤーを使っつなぐのがまた難しいので練習中。

・染め

赤間の粉を（赤茶色）使って染め物を試している。工夫して濃い色が出せるようになってきた。色止めは、する時もあるが、しない商品もある。

・販売

基本的には赤間硯協同組合の販売会に硯と一緒に出品する。イベントに誘われたら状況に応じて。あとはbase(インターネットショッピングモール)。最近見ていただく方が増えてきた。

・合同会社という形態

清水さんがひとりで始めたので、自己資金でやっていた。最初は資金を少なく行こうということで、合同会社にした。障害のある人がやっているという事で色眼鏡で見る人もいるが、それが嫌なので会社の名刺も何をやっている所か分からないという風になっている。

○課題と感じていること

・同じような形で作るのが難しい

・価格設定

年代的に、お金に余裕がある世代にとっては中途半端な金額。もうちょっと上げれば売れるのかもしれないが、そうすると子育て世代や若い世代には手に取ってもらえない。素材を求めると、価格が見合わない。ほんとは全部シルバーでやりたいが、メッキにせざるを得ない。1個が売れても利用者の1日4時間の給料。だが、4時間では1個製造出来ない。

○今後の展開

利用者ももくもくとやる人もいればやってる内にもやもやしてしまう人もいて、向き不向きがあるが、これで伝統工芸が人の目にふれるようになれば良いかなと考えている。硯職人にはなれないが、広めていくことやサポートはできるのではないかな。

2.2.4.竹・紙細工（鹿児島） ワークプレイスハイホー

調査先 合同会社ラディカルランド ワークプレイスハイホー
鹿児島市西伊敷7丁目13-21 wphiho.wp.xdomain.jp Instagram: wp_hiho
回答者 引地一郎（代表社員）
調査日 2019年8月29日(木)
調査者 岡部、後安、森下

○施設および就労に関する情報

利用定員 20名
利用者数と主な障害の種別 14名（精神7、知的6、身体1名）
福祉サービス種別 就労継続支援B型
職員数 5名

○製造工程や環境づくり

商品種別 竹細工を主に、竹製品と布や和紙との共作や、張り子などの創作活動
活動年数 2017年～
販売価格 竹弁当箱3,025円～、巾着袋（竹編み+刺繍）15,180円
販売先、卸先 小売店への委託、自社ウェブサイト販売

代表の引地氏は元・工房しょうぶ（障害者福祉施設 鹿児島市）職員。前職の頃から竹工芸訓練所に通い修得。誰もが買える値段で道具としての竹細工を作るのが願い。竹工芸の継承と、施設利用者の収入の向上、両方を目差している。

・鹿児島と竹工芸

竹林面積全国一で伝統的に竹工芸が盛んだが、後継者の育成が難しい。鹿児島市の4年間の伝統工芸継承補助制度（マイスター制度）もあるが、なりわいとしての仕事をしながら学習することが難しいのが現状。

ハイホーには、竹細工を学べる場として利用を希望する方もいる。そういう方には別途、課題を準備し、マイスター養成講座と同等のことが学べるプログラムにしてある。昔ながらの物づくりは、頭で考え、手足を使い、作る喜びを五感全体で感じることができる。これは、現代社会の中で薄れていっている部分であり、昔ながらの物づくりの良さを見直す重要性を感じている。

・伝統玩具のアレンジ

張り子の招き猫のほか、田の神さあ（田んぼの神様）やダルマなども製作している。干支シリーズとして来年の干支を招きネズミとして商品化した。

・利用者が製造に関わる際に工夫している事例

はこの招き猫の木型は職員が木工で作っている。工程…新聞、半紙、新聞、半紙、半紙、半紙、半紙（透けないように）。紙を貼ったあとに胡粉ジェツソを塗る。

治具を工夫している。四肢に不自由のある利用者に、トタンと磁石を利用した作業道具や、左手だけしか使えない利用者のための、はりこづくり用台座などを制作している。

・販売、情報発信

竹弁当箱はセレクトショップ「グッデイ」（鹿児島市）などで販売。グッデイにはアドバイスを多くもらっている。価格付けや、これならお店で取り扱いしたい／したくない、といった意見など

・活動をとおしたコミュニケーション、コミュニティのあり方

まだまだ認知度が低く、購入者が工房に訪問することは少ないが、SNSで繋がっていたりはする。福祉でなくハイホーというブランドで、ものの良さを売っている。対面して顧客と話すときにも、障害のある人ということは基本的には言わない。一般のマーケットで勝負したいので、妥協はしたくない。

○課題と感じていること

竹細工をメインにしたいと考えているが、利用者が楽しく仕事することを一番大切にしたいため、竹が得意な人がいることも配慮している。一人ひとりの得意なことを見つけて、それに取り組むことを重視したい。ザル編みから入って、その次に進む。できなければなぜそれはできないのかを徹底して考え、改善の努力をしてもできないときは、その作業は諦めて、別の「得意なこと」を探す。初期は編んだザルなどの縁の無い底ばかり溜まってまったく商品にならなかったが、やっと商品が展開できるようになってきた。ザル、弁当箱、うちわや竹編み底と工房で織った布を組み合わせたバッグなどを製造している。

○今後の展開

工賃を向上させたい。今は時給100円。現在は作家性を考慮して変動させておらず一律であるが、今後は働き方に応じて変更できるよう検討したい。販売は今基本的には鹿児島内だけ。今後、全国のセレクトショップや竹製品の専門店などにおろそうと計画している。

ネットショップを2019年11月めどに開設する。障害のあるなしにかかわらず、商品を扱う。竹製品は、「ハイホー」ブランドとし福祉色は出さない。そのほか地元工芸品も扱いたい。収益で竹山を整備し、ゲストハウスやショップなどの運営、そこからのさらなる就労の可能性を開拓したい。



2.2.5.栽培・糸紡ぎ・染め・織り・加工（鳥取） おりも んや

調査先 NPO法人おりもんや
鳥取市米子市加茂町1-17 www.orimonya.or.jp

回答者 小前澄子（理事長）
調査日 2019年11月11日(月)
調査者 大井

○施設および就労に関する情報

従事する利用者 約20名
従事する職員 5名（事務員1、現場3、理事長兼サービス管理責任者1）
昭和57年より無認可の作業所、平成21年より法人格の就労継続支援B型事業所

職員は、ものづくりをしたいというよりも福祉のことを学んだ人が来ることが多い。ただし、業務上織りの技術は身に付けてもらうことを事前に伝える。

・織りという仕事について

昔山陰は絹の一大産地があった。広瀬や倉吉は工業として栄えた、おりもんやのある弓ヶ浜半島は砂地であったため綿の生産が盛んに行われた。綿の生産をする中で、女たちは家人の衣服を織っていたが、その絹が評判となり弓ヶ浜絹として全国に知られるようになっていった。障害をもった人たちが地域に残った道具を動かすことで彼らの仕事をつくることはもちろん、弓浜の織という仕事を引き継ぎ残したいという思いで活動をはじめた。障害のある人の工賃を上げることが求められる今、織物は工程に時間がかかり価格もつけにくいので、工賃の向上という意味では不向きな仕事だといわれているが織物には綿の栽培～糸紡ぎ～染め～織り と様々な作業工程があり、障害のある人ができることから自分のペースで仕事に携わっていけるのが最大の利点。今、ゆっくりと時間をかけていいものをつくる、という文化が失われつつある。これは伝統産業に関しても言えることだが、福祉にも通じる話（工賃を上げるために、工程が少なく単価が安いものをつくるべし、といった考え方）だと思っている。

○製造工程や環境づくり

織りは特に納期を設けず、メンバーたちができる範囲で仕事を続けることを重視している。手紡ぎ糸を製品に作りあげていくには工夫を必要とし、手間な仕事ではあるが自分たちで糸をつくるということは、織りをする者にとって魅力であり飽きない仕事であるようだ。一方、紡績糸の使用は仕事や製品の幅を広げるという意味で役立っている。織りや刺し子の柄はメンバーの自主性に任せることも多い。スタッフが色味を指定して織ってもらうこともあるが、自分で考えられる人にはどんどんアイデアを出してもらうようにしている。

・ものづくりの現場で独自に工夫していること
利用者の身体に合わせて機を改造した。
道具としては完全なものだったが逆に利用者に使いやすいようにスピードを落とすよう工夫もした。
また、ノッティングのたたき道具を考案し県の鉄の研究所で作ってもらっている。
精錬した糸と未精錬の糸とを区別するために、テープの色を分けるといったこともしている。
藍の染は地方の紺屋で染めてもらっている。

・販売、情報発信

年2回のおりもんや仕事展と福祉施設の商品を扱う店での展示販売会（春、秋）
店舗への委託及び買取販売
店舗を通しての県外への展示販売（鳥取物産展など）
フライヤー配布
ブログ、SNS、ウェブサイトでの発信

看板商品というよりも、どの商品もまんべんなく売れているような印象。洋服づくりを担当しているスタッフの山根さんがつくる服の中には「KOKONOKO」というブランドがあり、それを目掛けて買う人もいます。

購入した人たちは、「おりもんや仕事展」は楽しみに来てくださっている。

○課題と今後の展開

一人当たりの平均工賃で3,000円アップを目標にしているが難しい。
生産量（在庫）だけでなく売上也伸ばさなければならない。

利用者たちの年齢が上り、可能な作業範囲が変わってくる。そういった時に、伝統に縛られすぎることなく、今一緒にいる人たちと何ができるのか、考えていきたい。消費社会になっている今だからこそ、おりもんやが行っている裂き織りのように、捨てられるものをもう一度織りあげるような日本の伝統的な技法に意味があるのではないかと考えている。
行政が伝統の継承に取り組み始めた以上、おりもんやの当初の目標であった「地域の伝統を残す」という役割も変わっていくのかもしれないと思っている。



2.2.6.和ろうそく（京都） 中村ローソク

調査先 有限会社中村ローソク
京都市伏見区竹田三ツ杭町57-8 www.kyorousoku.jp
回答者 田川広一
調査日 2019年12月25日(水)
調査者 岡部

○施設および就労に関する情報
従事する障害者 現在2名、1名は絵付け、1名はろうそくづくり（ろうそく担当の方は現在お休み中。絵付けをしている方は3年目。月に1~2回の出勤。それ以外は別の仕事をしている。）
従事する職員 6名

採用に関して、障害があるというのはほぼ考慮していない。職人としてできるかどうかという見極めが基準。

○製造工程や環境づくり
商品種別 ろうそく、ハンドクリーム
活動年数 1887年～
販売価格 伝統的なハゼをつかったものと、米ヌカ&パーム油の組み合わせのもので価格帯が変わる（1本80円から50万円まで）
商品の特徴 京都で障害のある人の表現活動を支援している、天才アートKYOTO（NPO法人障害者芸術推進研究機構）と協働し、ろうそくに絵柄を描いてもらっている。天才アートのアーティストが直接描くものと、図案を作ってもらい職人が描くものがある。直書きのものは一本約1000円で販売。

・障害のある人が製造に関わる際に工夫している点
ろうそく本体の製造は火を使うなど障害のある人が関わりにくい部分があり、絵付けをお願いすることが多い。絵付けの技術を身につけることで、和ろうそく以外にも手に職つけられるようにという意図もある（かんざしの絵付けなど）。

・和ろうそくの需要と供給のしくみ
寺などでの需要が一番大きい。寺でつかう大きな和ろうそく（何十万円もする）は、一回で使い切らないので、使用途中のものをグラム換算で買い取り、あたらしくろうそくをつくりなおし、再びそのお寺に買ってもらう。素材も無駄にせず、またお寺とのつながりを作り続けるという意味でいい循環がある。

○課題と感じていること
・和ろうそくの現状
職人は日本国内20人ほど。半分くらいが京都にいる。40ほどあった業者も半減以下。シェアは減るいっぽう。防火意識が高まった結果だが、実は和ろうそくで火事はおきにくい（火勢が弱くすぐに消えるため）。

原材料のハゼづくりの産業が縮小しているため、どう活かすかを考えている。事例として、ハンドクリームなど。

・就職を希望する障害のある人との出会い
京都市内の支援学校や福祉施設から、3ヶ月に1回くらいは研修や見学に来るが、なかなかマッチングができない。施設側が雇用形態についてこだわっていたり、親御さんが終日付き添ってしまって、一人で作業ができないなど。

○今後の展開
伝福連携事業は国や行政のタテ割りではなく、いろんな業種が混じった取り組みをすることが大事だと感じている。
和ろうそくが単体では売れないので、アートイベントや食のイベントとコラボレーションしながら売り込みをしている。家庭での使用が減る一方、キャンドルナイトなどの明かりイベントで呼ばれることが多くなった。一般的な洋ろうそく（石油を使用）にくらべて本当にエコ。ろうそくだけ、アートだけだと間口が狭いので、仲間をつくっているんな切り口で見せていくことが大事だと思う。



2.2.7.東北の郷土玩具

企画展「東北・奈良・九州の郷土玩具～出張MUTO &津屋崎人形」に関連して、東北（福島・山形・秋田）でものづくりや展示、販売などの仕方などを調査した。

調査先 橋本広司民芸
 福島県郡山市西田町高柴字福内41 miharukoma.com/experience/1008
 回答者 橋本広司
 調査日 2020年3月22日(日)
 調査者 藤井

橋本氏は日本の張り子界を代表する作家であり、若手の張り子作家が学びにきていた。

【調査トピックス】

・江戸時代から受け継がれる木型を用いて制作される張り子。和紙は仕入れた状態の大判のまま3-6層ほどに糊付けされ、張り子の種類に応じて厚みのある素材がつけられる。



・初期の作品は、張り子ではなく土人形で成形されており、制作に使用する型も土素材の型が用いられていた。現代においては、伝統的な顔料からすぐに入り量産時に扱いやすい絵の具に切り替えるなど、代々受け継がれる技術とともに、新しい素材と工法が組み合わされている。

・集落で伝統的に継承されるお祭りとともに、張り子の制作が続いている。毎年、正月を迎える時には、七福神面やひょっとこ面をかぶり、農産物の豊穰を願い伝統舞踊が披露されている。かつては、農閑期の仕事として張り子づくりが行われていた。



・かつて制作されていた天狗面。現在では、髭に用いられていた麻素材の仕入れが困難であるため、制作が行われていない。工房兼店舗となっている空間や併設された資料館には大小様々な張り子や貴重な木型や全国の郷土玩具に関する資料が並ぶ。



・日常的な張り子の制作は、橋本氏、橋本氏の息子、雇い入れている職人の3人で行っている。他にも集落に在住する親族も張り子づくりを担っている。これまでは家系で代々工房を引き継いでおり、橋本氏いわく「先人が制作した張り子を見てみると、代々の制作に対する考えや受け継がれてきた知恵が見て取れる」という。



調査先 東北の酒と玩具MUTO
 秋田県大館市岩瀬字大柳89-9 sakeganmuto.com
 回答者 武藤純彦、佐藤孔代
 調査日 2020年3月23日(月)
 調査者 藤井、森下

東北地方の郷土玩具をセレクトして一堂に展示・販売している。東北一円の郷土玩具についての歴史について話を聞いた。

【調査トピックス】

・郷土玩具で用いられている代表的な素材は、木・土・紙の3種類。その中には土に和紙の繊維が練りこまれているなど、地方や工房によって採取された素材や、製法など独自の工夫が見て取れる。



・後継者などの課題から、各地方で制作されている張り子の制作が途絶える“廃絶”の状況が生まれている。MUTOはこれら廃絶となった郷土玩具をコレクションしている。



・郷土玩具の仕入れは、直接、工房に出向き作家と対面したうえで、商品の仕入れを行っている。郷土玩具は一点づつ手作りで生産されているため、作家の趣きや工房の歴史を理解しながら販売している。



調査先 蔵六面工房
山形県上山市長清水1-18-3 zorokuharico.com
回答者 木村葛一郎
調査日 2020年3月25日(水)
調査者 岡部、藤井、森下

若いつくり手が工房を運営。制作内容や販路について、話を聞いた。

【調査トピックス】

・先代の工房を引き継ぎ、木村氏が2代目として制作を行っている。現在は、母がお面制作の生地づくりを行い、絵付けを木村氏が行い、分業制で制作されている。



・石膏型の内側から和紙を貼る工法でお面が制作されている。内貼りすることによって、お面の表面が艶やかに仕上がり、和紙本来の素材の魅力を活かした張り子が制作できる。



・主な販売先は、卸問屋が中心となっている。その他の販売店も、古い郷土玩具を扱う店舗が多い。先代は張り子面に対するアイデアが豊富で様々な型のお面が生まれた。2代目の木村氏はかつてサラリーマンで営業職をしていた経験を生かし、先代が制作した型を用いて制作するとともに、まずはお面や郷土玩具の存在を認知してもらうための広報に注力されている。3Dプリントなど新しい技術や製法の活用にも関心があるとのこと。



調査に合わせて、障害のある人のものづくりの現場ではたらく福祉施設職員や、行政の伝福連携事業の取り組みの担当者にインタビューをした。

2.2.8.インタビュー01「しょうぶ学園のものづくり」

鹿児島市内で活動するしょうぶ学園。障害のある人だけではなく職員もクラフトマンとしてともにものづくりに関わる。全国的にファンが多く、見学者も多い。管理者と職員から、福祉施設でものづくりに取り組む意味、活動や製品をどう伝えていくかなどを聞き取った。

訪問先 社会福祉法人太陽会 工房しょうぶ
鹿児島市吉野町5066番地 www.shobu.jp
回答者 福森伸（統括施設長）、福森順子（統括副施設長）、福森創（統括主任）、
榎本紗香（デザイン室統括主任）、小野好美（主任補佐）、
相良望人（デザイン室）、宗像恭子（nui）
調査日 2019年8月29日(木)
調査者 岡部、後安、是永、森下

- しょうぶ学園において、伝統工芸と障害のある人の仕事の組み合わせという取り組みについて、どう思われますか？

福森伸〉私たちの活動は人間が基本なので、伝統工芸のように人から人へ受け継いできた知恵を無視してはものづくりできない。また、和紙漉きのような、作り手が少なくなっている工芸も福祉施設の仕事としてなら継続することができると思っている。創造性は自由であっても、手法は職員が担う、そういった役割分担が必要。利用者の支援をするのではなく、職員自身がものをつくるのが大事だと思っている。職員の共通認識は、無になってもものをつくる、機能的で目的があるものをつくる、というところ。

- 現場ではたらく職員の皆さんは、ものづくりについてどう考えていますか？

相良〉私は他企業での勤務経験があり、今年しょうぶ学園に就職した。3ヶ月介護研修を経てこれから木工の部署に入るところ。自分が商品を見たり触れるときに、量産されたものに対しては扱いが雑になり無名でも手作りわかるものは愛着が湧いていることに気づく。ただ、量産されているからこそ多くの人の手に届くという大切さも感じる。

榎本〉現在入社10年目でデザイン室のチーフをしている。しょうぶ学園のほとんどの展覧会の企画を担っている。点や丸といった利用者の表現は、自然環境に囲まれて生み出されているように感じる。そう考えるとしょうぶの活動はおのずと伝統工芸につながっているのではないか。

福森伸〉利用者の表現を「商品」にしていくことへの「抵抗感」をもつことも、ある意味必要である。

福森創〉6年くらい前から陶芸をはじめた。民芸の作家に習いに行っている。民芸と利用者の作っているものは感覚的にマッチするところがあると感じている。伝統工芸のいやらしさみたいなものが無いと思う。

宗像〉nui（布地や服へ刺繍を施し作品制作をする部署）を担当している。大学では建築を専攻。これまで一般企業で生産関連の仕事をしたり、鹿児島の工芸品を扱っていたことも。利用者と過ごしていて感じるのは、人はつくるという行為がベースにあり、それに自然に向き合っている人たちなのだということ。nuiでは、利用者の許可を得たうえで職員がで自由に布にハサミを入れる工程があるが、作品に手を入れることにはとても抵抗がある。

福森順子〉鞆を例にとると、鞆としての使い勝手よりも、作品部分を引き立たせることを重視しているが、利用者の刺繍に配慮しすぎた結果、あまりよくない商品になってしまったことも。どう使うかは、買った人に委ねる。結果として1点ものの商品になるが、職員がある程度関わられるように定型のつくり方をしているものもある。

小野〉しょうぶ学園では広報物や商品についてのライター、クラフトショップの運営などを行っている。息遣いの感じられるような商品やその環境に触れたり惹かれたりするようになったのは、しょうぶに勤めるようになってから。副施設長（福森順子）が言ったような「売る」が「つくる」に勝ってはいけないう言葉に、かつて広告業界に身を置いていた頃は当たり前だった「ものは消費のためにつくられる」とは真逆の世界を感じている。また、「自分でものをつくってもいい」という発想もそれまでは持っていなかった。

福森伸〉しょうぶの商品の場合は職員のはたらきに、利用者たちの偶然やこだわりがひとさじが入ってくる。それが他にはにない、しょうぶのクラフトの基本。だから、手を加えるとか加えないとか、どちらもありうる発想である。

- 商品を売るとき、伝えるときに気をつけていること、取り扱い希望するお店を判断する基準は持たれていますか

福森順子〉売ることに注力しなければならないのは苦痛。社会福祉法人のよいところは、ものをつくっても売ることを第一に考えなくてよいことだと思う。

福森伸〉障害がある人がつくっていることを売りにする言い方は殆どしない。各地から問い合わせがあるが、しょうぶのものづくりの考え方を理解して下さっている方とは取り引きをはじめめる。メールや電話で終わるより、結局しょうぶまで見学に来て取り引きが決まること多い。施設の活動趣旨と違うように思われた時は断る。1点ものが多いので、カタログづくりが追いつかなくなっているのが課題。一般購買者も、工房に来て購入する方が多い。

2.2.9.インタビュー02「京都市における伝福連携の取り組み」

西陣織、京鹿の子絞、京友禅をはじめ、74品目を伝統産業製品に指定する京都市。「京都市伝福連携担い手育成支援事業」を中心に、手仕事に興味のある障害のある人と、担い手や技術の継承に課題を抱える伝統産業とをつなぐ取り組みが続けられている。担当者に現状と今後に向けての話を聞いた。

訪問先 京都市保健福祉局障害保健福祉推進室
京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル
回答者 田中のぞみ（京都市保健福祉局障害保健福祉推進室就労支援担当）、尾池祐亮（京都市産業観光局商工部伝統産業課染織担当）
調査日 2019年10月7日(月)
調査者 中島

- 伝統工芸と福祉の最初の出会いはどのようなものでしたか

田中〉平成27年度から始まった見学会が、京都市での伝福連携の最初のきっかけ。伝統産業の工房の見学会、職人と施設職員が現状や課題を話しあう意見交換会をセットで行っている。お互いに接点が全くなく、福祉施設に通う人が伝統工芸の仕事が実際にできるのかもわからない中での開催であったため工房を訪れるということ自体が画期的だった。

福祉施設の職員は定員を満たしたが、伝統産業の事業者を集めるのは難しかった。そこで障害のある方へのご理解があるとお聞きして声をかけたのが、有限会社中村ローソク（和ろうそく）と有限会社横山竹材店（竹細工）。伝統産業の職人さんからは、若い人に技術を継承しようとしても、長く続かないという課題があるという話を、聞いていた。福祉施設の職員からは、近年精神障害や発達障害のある人が増えてきた一方で、その人たちに適した仕事がないということや、ものづくりに興味のある障害のある人も多いということを目にしていた。障害のある人は、状況が整えば伝統産業で長く働けるのではと考えた。単純な作業だからというだけでなく、京都で伝統産業の仕事に携わることができるというのは、障害のある人が仕事を通して自己肯定感を高めることができるのではないか、という思いもあった。

- 伝統産業、障害のある人、それぞれの反応は

田中〉最初はなかなかうまくいかないこともあったが、中村ローソクでは「京都市障害者雇用促進アドバイザー派遣等支援事業」を活用したことが一つの転機になった。就労支援アドバイザーの提案によって、ろうそくづくりの中でも、絵付けの工程を分解し、作業の標準化のためのマニュアルを考え、絵付けキットを開発した。キットを用いて障害のある人に絵付けを体験してもらえる機会を創った。体験会を開いてみると、参加者の中にはキットに頼らず、見よう見真似で絵柄をつけていく人も。そうした人が少なくなかったことには驚いた。

中村ローソクでは、今も継続して働いている障害のある人がいる。障害のあるなしにかかわらず自宅でろうそくの絵付けをしたいという人には自宅で描いてもらったり、子育て中の人も多く勤務しているなど、従来から柔軟な働き方が認められていた。障害があ

るということよりも、まずその人を理解しようという姿勢があったようにも感じる。障害のある人を雇用するというのではなく、職人を迎え入れるという気概で取り組まれた。出来上がったものは、障害のある人が作ったものとしてではなく、ひとりの職人が作ったものとして売り出されていく。中村ローソクに勤める障害のある人は、この取り組みを通して社会に出られた、と話している。かつて昼夜逆転だった生活が整い、人と接することも苦手だったが、仕事をしていくなかである種鍛えられ、一つずつクリアできたと言っていた。自分を受け入れてくれる場所があり、働いて対価を得るということはその人の日々の生活にも大きな影響を及ぼすのだと感じる。

- 今後つづけていくにはどのようなことが必要でしょうか

田中〉中断している事例もある。実際に伝統産業の中で働いてみると、本人が取り組みたい仕事と、事業者がしてほしい仕事があいつでも合致するわけではない。就労支援アドバイザーや支援機関も定期的に面談をするなど接点を持ち続けていた。障害のある人が一つの場所で長く働き続ける場合、経営者側も障害理解を深めていく必要があると感じる。特に発達障害の人などは、余裕を持って取り組んでいるようでも、実は負担に感じていることがあるように、課題が顕在化しにくい。伝統産業の仕事に障害のある人が出会い、継続して働くためには、福祉の専門性を持つ人たちと伝統産業に関わる人が対話を続けることが必要だ。

それでも体験会をやっていると、この人にはこんな適性があるんだという新しい発見がある。一つの福祉施設に一人、二人だとしても、取り組みを続けることで周知され、広がりを持つこともある。業態が増えると障害のある人が関わることのできる仕事の幅も広がる。今は染織の仕事が多いが、京鹿の子絞、西陣織の糸繰り、京組みひもや水引工芸などの取り組みも始まる予定。伝統産業は工程それぞれを職人が受け持っているので、仕事を切り出すのも難しい。それでも、障害のある人が持つ技術が確かなものであるとわかった時からは、あまり障害ということが話題にならない。障害のある方の働き方は、施設内で働くか、企業に雇用されて働くかの二つに一つではなく、その中間を模索する就労支援もあってよいのではないか。

- 伝統産業の視点から見て可能性や課題はありますか

尾池〉伝福連携以前に伝統産業自体にも課題がある。後継者不足はその一つにすぎない。人を雇いたいと思うには、まず商品がより多く販売できるように販路を開拓したり、伝統産業で生計を立てられるようにすることが重要。後継者を増やすだけでは結局行き詰ってしまうので、全体の状況を改善することが必要だと考えている。それでも、伝統工芸士の懇親会でも伝福連携が話題にあがるなど、注目されることは増えてきた。私たちは、障害のある人を雇うことに不安があった時にサポートにはいり、事業者や組合のつながりで情報交換をしたり、民間で話が進んでいくよう促すような役割。今後は、たとえば西陣織と京料理という異なるジャンルをつなぐなど、ネットワークを構築したりさらに細やかなサポートをしていきたい。

以前は子どもの福祉に関わっていた。そのときは、福祉施設や親、子どもなどを行政が「支える」「助ける」という視点だったが、今、産業の分野に関わるようになると、自力で立てるように応援するための仕組みをどうつくるか、という視点にかわったと感じる。マインドセットが変わった。

田中〉福祉側の意識を変える必要があると常々感じる。以前、海外の福祉先進国で学んだ日本人の障害のある方から、「自分にはこれができるという感覚を得たときに、人は必ず変わる」という話を聞いた。これまで日本では障害のある人の可能性を、福祉の側が見落としてしまっていたことも多かったのではないか。

◎ 調査全体を振り返って

福祉施設、工房、セレクトショップなどに訪れ、障害のある人とのづくりについて現状や課題を聞いた。そのなかから特に5つの項目にわけて振り返る。

・地域の伝統工芸を名乗る場合、根拠をどこまで求めるのか
素材や工程をすべて踏襲できるものから、一部しか採用できない場合もある。外部で活動する職人が常駐して日々検品やプロセスをチェックできる体制もあれば、独自に基準を設ける場合もある。

・作業環境の整備
匂いや熱を伴うもの、スペースへのアクセス、取り扱いが難しい道具類など、障害のある人には厳しい環境もある。そのなかで、それぞれの現場で道具や工程の見直しなどが見られた。また、可能なかぎり安全な素材に代替をした結果、新しいものづくりの可能性を提案する事例もある。

・福祉事業とものづくりのバランス
利用者の勤務状況や作業ペースから、あえて生産量をあげずにじっくりとものづくりに取り組む事例もあった。売り上げだけをめざすのではなく、ものづくりの工程の時間や空間を大事にする活動も多数あった。その場合、ものづくり以外の食品製造、農業、飲食店経営など、多様な仕事を法人内で整備して全体の工賃（障害のある人の給料）を確保する工夫が見られた。

・福祉職員と伝統工芸の関わり方
職員が伝統工芸の技術を身につけ、施設内でものづくりを始める事例も。技術習得にはその法人が資金面でのサポートすることもあるが、技術を身に付けた職員が退職してしまうケースもあった。

・外部からの製造受注について
地元の土産店などから、安く多く売れるものをたくさん受注して製造を安定化し、技術を身につけてから質の高いものづくりに取り組む、という事例があった。それぞれに目的をもったものづくりをしているのが印象的だった。

2.3.手しごとに触れ交流する機会の創出

2.3.1.お茶会

生活空間において、障害のある人の表現と伝統工芸の融合を感じることができる場をつくることを試みた。築90年の古民家を地域の方の協力のもと借り、会場とした。ここに、障害のある人の絵画作品、既存の工芸品、中国茶などを組み合わせ、ゆとりと発見のある時間づくりを試すことができた。障害のある人の表現が本事業を通じどこでどのように伝統工芸とであい、発信されるかを考えることができた。

日程 2019年6月30日(日)
会場 奈良県葛城市 個人宅
参加者数 20名

《お茶会を取り組みとして選んだねらい》
・有識者会議をへて導き出されたNEW TRADITIONALの理念のひとつに「つかう文化だけでなく、つくる文化の復興」がある。これを体験する場として、障害のある人自身がお茶をたてる立場になり、来客をもてなす、アートや工芸といった分野を内包したひとつの空間をつくりだすことを目的とした
・日本の伝統文化である茶の文化を現代に更新する試みとして

2.3.2.「つくることの喜びにふれる二日間」

お茶会、展示会、トークイベント、ものづくりの体験ワークショップを実施した。茶会はGood Job!センター香芝のメンバーが茶を淹れたり、菓子を提供するなど、ともにつくる、つかう場を立ち上げることができた。手しごとを身近に感じ、つくること、つかうことの楽しさを体験する場を作った。トークイベントでは、ニュートラという概念やものづくりの周辺について来場者を交え話を深めた。

日程 2019年10月12日(土)、13日(日)（※台風19号の影響のため12日を中止）
会場 奈良県葛城市内 個人宅
参加者数 40名

○「音の茶会」
たんぼの家アートセンターHANAのメンバーの作品を展示した空間で喫茶した。
日時 10月13日(日) 13:00～、16:00～ 各回1時間
参加者数 10名

提茶 花谷龍介（Good Job! センター香芝）、守屋里依（ippo plus/無由）
菓子 Neu（Good Job! センター香芝）
絵画 澤井玲衣子（たんぼの家アートセンターHANA）
音 『piano language』（作：原摩利彦&澤井玲衣子&sonihouse）
※音声データの再生
しつらえ 守屋里依

○「ニュートラ談義」

日 時 10月12日(土)13:00～14:30 ※中止

登壇者 多田智美 (MUESUM)、原田祐馬 (UMA/design farm)、
水野大二郎 (京都工芸繊維大学KYOTO Design Lab 特任教授)

日 時 10月13日(日)14:00～15:30

登壇者 白水高広 (株式会社うなぎの寝床代表取締役)、
永田宙郷 (合同会社 ててて協働組合 共同代表)

参加者数 15名

○手しごとの楽しさを体験する場

日 時 10月12日(土) 13:00～15:00 Good Job!張子の絵付け ※中止

10月13日(日) 13:00～15:00 津屋崎人形の絵付け

講師＝原田翔平 (筑前津屋崎人形巧房)

参加費 1,000円・予約不要

参加者数 10組

○旅商 (展示販売)

うなぎの寝床…福岡・八女の地域文化商社「うなぎの寝床」より、工芸品など

GOOD JOB STORE… 障害のある人の手しごとの魅力をもった、Good Job!張子など

○関連トークイベント

鹿児島、九州の伝統工芸や地場産業、ものづくりに携わり、九州から発信する新しい工芸を意味する「nikacraftニカクラフト」について伺い、事業の参考にした

日 時 10月14日(月) 14:00～15:30

会 場 Good Job!センター香芝 (香芝市下田西2丁目8-1)

登壇者 森 香菜 (Goodday)

参加者数 15名

《【ニュートラ談義 10月13日(日)] 抜粋》

「つくり手とつくり手の相互刺激」

Good Job!センターやたんぼぼの家など、いわゆる福祉施設などでのものづくりを見ると、つくり手の人が思考して手を動かして作ったものを、職員の人やボランティアの人が解釈して、また手と頭を動かす作業をパートナーシップを組んでいるところが面白い。また、隣の人の動きを見ながら自分のものにしたり、オリジナルにしていく事例も集団のものづくりならではの面白さ。伝統工芸の現場ではものづくりのこと、つかい手のことなど一緒に考えてくれる人が少ない。頭と手の行ったり来たりがあるところが良いところだと思う。次は伝統工芸のつくり手と福祉のつくり手の交流を産んでいければいいのではないかと思った (白水)

「誰に対してものを売るか、つたえるか」

ものを売るという感覚より、仲間を増やすにはどうしたらいいかという感覚。ものを介して仲間を増やす方法を考えよう、という発想で、マーケットの運営や商談会を実施している。ものを売ることは通帳の残高を見るのではなく、信頼を得て行く方法だとまずは考えている。相手はお金を通じて買うかもしれないが、誰がどういう思いでどうつくっているかをきちんとつたわる仕組みを残していくことだと思う (永田)

「伝統技術と最新技術の融合」

何代も玩具を作られていて伝統工芸の人は昔からの技術はあるが、最先端のものは取り入れてなかったりする。こういう発想は今までなかった。古典的な部分を大事にしながら変えられるところは変えていったり。逆に、でもこれは変えるべきではないよね、などといった議論を多分野の人ともして行ったほうが良いと思う。3年前くらいからいろんな人にお声がけする形で意見交換の場を持っている (白水)

「つたえる、をどこまで深めるか」

展示会で製品をみるとみんな“面白い”というが、見ただけで自分の空間にあることを想像できる人と、実際に使ってみて豊かになった経験のある人がいる。今、わかりやすくしてあげないとなかなか物が売れない時代。その消費者の想像力をどうつくっていくか。店がそれをどう誘発できるかまでを考えることが必要だ。

ものをつたえるときに二つの考え方がある。一つはつくり手の思いを受けてどうネットワークや繋がりを作って行くか (つたえ手から出発するものづくり)。もう一つは生活者に合わせて、そのフォーマットを選び、作って行くやり方 (つかい手から出発するものづくり)。ただ、このふた方向だけでもなく、さまざまなやり方がある。「こういう人たちに響くかもしれない」とフォーマットや表現を組み合わせる行くことが重要 (白水)

「ものづくりは何を約束するか」

(現在、かたちあるものだけではなく、情報や仕組みが価値を持つ時代に、ものだけではなく、プロセスや空間をどうパッケージして伝えていけるのか、という質問に対して)

ものをつたえる (売る) 際に、大事にしていることは「プロジェクト/プロセス (ものづくりの過程) /プロフィット (利益) /プロミス (約束)」の4つのP。その中でプロミス (約束) ということについて考えたい。事例としてこの会場で紹介しているモバイル。必ずしも生活を便利にしたり、効率性があるものではない。しかし、売り場や生活空間で微風でも動くものがあることで、空間に安らぎをあたえる。つまりモバイルは空間を豊かにするということを約束している。また、この商品開発をしている時に、とにかくたくさんつくる、すぐに売る事をめざさなかった。その売り場にあり続けることで、ショップ店員やお客さんが体験し、売り場での信頼を得る、ということを心がけた。プロミスが信頼につながる。そこから次の新しい仕事に発展する可能性もある (永田)



2.4.実例づくり

日本各地の福祉施設で取り組まれている表現活動と、伝統工芸や地域のものづくり、デジタル技術などの連携によって、新しい工芸としての創作活動にアプローチした。

奈良を拠点に、主に福岡、山形と連携し、5事例を残した。

実例をつくる過程においては、職人などの技術者と障害のある人が互いの技や表現に敬意をはらいながら、ひとつひとつつくりあげていった。

その中で、福祉施設職員、デザイナー、職人、といった多様な人をつなぐコーディネーターも重要な役割を果たした。

日本の暮らしや風土に根差した素材や技法と、障害のある人の表現が混ざりあうまれた作品や製品は、これからの展開を予感させるとともに、ものの価値、ものづくりの価値について再考する機会となった。

2.4.1. 緞通

山形県内3カ所の福祉施設と連携し、障害のある人の表現を取り入れた緞通（※）を5種類制作した。 ※緞通（だんつう）...高密度の手織り絨毯

基 盤：米沢緞通

連携先：社会福祉法人ほのぼのの会わたしの会社、社会福祉法人さくらんぼ共生会さくらんぼ共生園、株式会社修誠会しょうがい者就労継続支援B型事業所「くらら」

ファシリテーター、ディレクター：吉田勝信（吉勝制作所）

コーディネーター：〔山形〕武田和恵（やまがた障がい者芸術活動推進センター ぎやらりーら・ら・ら）、〔全体〕藤井克英（Good Job!センター香芝）

協 力：米沢絨毯株式会社 滝沢工房

手 法：

各施設に吉田勝信氏が訪問する

- ① 福祉施設にある創作資源を活用して障害のある人が創作した図柄を、緞通のデザインに使用する
- ② 緞通の保守技術である「植え込み」の手法を障害のある人が体得し、既存の緞通に「植え込み」で創作表現する

手法①ワークショップ記録

- ・社会福祉法人ほのぼのわたしの会社 2020年1月28日(月)
参加者数 10名
内容：模造紙へ絵の具で着彩
- ・社会福祉法人さくらんぼ共生会さくらんぼ共生園 1月27日(月)、2月13日(木)
参加者数 各10名
内容：粘土を平面状にちぎって配置し、それをプレス機にかける

わたしの会社



さくらんぼ共生園



手法②ワークショップ記録

- ・株式会社修誠会 しょうがい者就労継続支援B型事業所「くらら」 2月28日(金)
参加者数 15名
講師＝滝沢幹夫(米沢絨毯有限会社 滝沢工房)
内容：緞通の「植込み」技術



2.4.2.コラボもんぺ

福岡県八女「うなぎの寝床」が扱う現代風もんぺのB品(少しほつれや傷があるが、使用には問題ない製品)に、障害のある人が刺繍やシルクスクリーンプリントをほどこし、一点ものもんぺに仕上げた。

基盤：もんぺ(久留米紺ほか)

連携先：たんぼぼの家アートセンターHANA(奈良市六条西3-25-4)

手法：刺繍

連携先：Good Job!センター香芝(奈良県香芝市)

手法：シルクスクリーンプリント



2.4.3.郷土玩具

基盤：筑前津屋崎人形モマ笛(福岡県)

連携先：Good Job!センター香芝(奈良県香芝市)、たんぼぼの家アートセンターHANA(奈良市)

手法：手描き(アクリル絵の具、ポスターカラーペン、油性ペン)

ふだん「グッドジョブ はりこ」の絵付けを仕事として行っている人が、モマ笛に定型でなく自由な絵付けをほどこした



基盤：グッドジョブ はりこ

連携先：筑前津屋崎人形巧房(福岡市)

手法：手描き(顔料、アクリル絵の具、ニス)

津屋崎人形の職人が、定番の意匠をグッドジョブ はりこの形に沿わせて組み立て直し、絵付けをした



2.4.4.デジタル技術を活用した張り子の制作

デジタル工作技術を活用した張り子の造形

ハプティクスという触覚技術を使った3Dモデリングシステム「Geomagic Freeform」を障害のある人が活用した工芸品の開発をめざした。工芸手法の一つである張り子づくりにおいて、原型制作の工程にデジタル工作技術を導入した。

○ 目的

障害のある人の表現活動における創作手段の選択肢を広げることを目的とした。デジタル工作技術の新しい活用方法について実践研究を行い、デジタルネイチャー世代の新たな立体造形の手段を模索した。

○ 内容と実施期間

「Geomagic Freeform」は、ペン型の機材を押したり引いたりすることで、振動や動きの制御などの感覚が手に伝わり、造形物に触れずとも直感的に3Dデータを造形をすることができるシステム。造形物に触れず直感的に3Dデータを造形をすることができるため、素材の取り扱いの得手不得手や専門性を必要とせず、素材の特性やコストに制限されず自由な発想で制作することが可能となる。このシステムのメーカー企業から期間限定での機材提供を受け、初心者でもわかりやすい操作の手引きを作成し、障害のある人が3D造形の手法を体得できるような環境設定を行った。Good Job!センター香芝で新たに商品開発する3Dプリント型を活用した張り子商品の制作において、障害のある人による原型制作の手段としてこのシステムを用いた。

- 1) 「Geomagic Freeform」の導入レクチャー：6月11日／操作手引き作成：6月10日～12日
- 2) 創作の試行：①6月11日～7月19日、②9月14日～15日、③1月16日～3月27日

○ 成果

2021年の干支張り子の原型・3型の3Dデータを制作した。この制作データをもとに3Dプリンターで張り子の原型を出力し、商品化に向けたサンプルを試作した。二つの型は、イラストから3Dデータを制作し、一つは立体作品を3Dスキャンしたデータをリタッチして原型を制作した。従来の張り子の原型は彫師が数ヶ月の期間をかけて制作された木型を使用していたが、可変的で応用しやすいデジタルデータを活用することによって、工芸品制作の新たな手段を示すことができた。

○ 課題と展望

システムが非常に高価であり、産業用以外で活用されている事例はほとんど見られない。しかし、この3Dプリントを活用した張り子のように、デジタル技術と手仕事を適所で組み合わせ制作手法が変わると、伝統工芸の新たな表現へと昇華できる可能性がある。素材を用いないため環境課題に配慮したサステナブルなものづくりが行える点でも需要が見込まれる。

実施主体：社会福祉法人わたぼうしの会 Good Job!センター香芝

システム提供：株式会社スリーディー・システムズ・ジャパン



2.4.5.養蚕とシルクを用いた商品化

養蚕から取り組む絹糸を使用した製品化にむけた試行

蚕を飼ってその繭から生糸（絹）をつくり、それを使用した製品をつくる一連の流れを体験し、かつて日本の主要産業であったが現在は斜陽となっている養蚕業を現代にいかしていくために障害のある人や福祉施設がどのように関わることができるかを検討した。

○ 目的

桑の木を育て葉をとり、蚕を育て、糸をひき、製品づくりをめざすという一連の取り組みを年間を通して行うなかで、養蚕業について体験し、文化的背景も学び、今後、製品づくりもできるように取り組む。

○ 内容と実施期間

桑の木は前年度より植えており、週に一度畑にいった世話をを行った。また、蚕は宮城県にて蚕の普及を行っている団体より、100頭を3回目の「眠」の状態7月8日着で送ってもらった。その後約1カ月にわたり、桑の葉を与え、飼育を行った。7月22日以降、徐々に糸をはきはじめ、7月25日にはおおよそその蚕が繭をつくりはじめた。その後1週間から10日前後で収穫を行い、いったん冷凍保存した。8月26日に専門家のアドバイスを受けながら、糸をひく作業を行った。飼育から糸を引く段階まで、障害のあるメンバーにかかわってもらい、日誌をつけてもらった。

並行して、絹糸を使用した製品化にむけてはデザイナーの長岡綾子さんに協力を依頼。打ち合わせののち、はじめに地元の素材と絹糸を組み合わせてアクセサリーを制作することを検討するために、橿原市にある貝ボタンのメーカー「4Nov」を訪問した。また、糸をくみひもとして活用することを検討するために、6月24日に京都・宇治市にある「昇苑くみひも」を訪問。それらの訪問をへて、糸をひく工程やくみひもを制作する工程などを障害のあるメンバーと実施した。

○ 成果

絹糸を使用した製品化においては、絹糸を仕入れるところからではなく、それ以前の蚕を育てる、また桑の葉をとってくるという過程ふくめて体験することを通して、製品をつくるだけでなく、動植物をふくめた自然に触れながらのものづくりをできるということを実感した。また、福祉施設で蚕を育てることで、施設を訪れる人が蚕そのものや絹糸の製品化に高い関心をもっていることがわかった。

○ 課題と展望

糸をひく行為やくみひもをとおした製品化を検討していくなかで、製品にしていくうえでの課題の多さ（専門性の高さ、作業の細かさ、商品になったときの価格のつけにくさ）もみえてきた。そこで、来年度も引き続き、絹糸を使用した製品化に取り組むが、この過程でみえてきたこと自体をドキュメントとして発信していくこともふくめて多くの関心ある人のネットワークをつくっていくことも、検討していきたい。

実施主体：社会福祉法人わたぼうしの会 Good Job! センター香芝
技術協力、アドバイス：寺川真弓（染織家）、長岡綾子（デザイナー）

2.5.事例を紹介する展覧会等の開催

東京にて展覧会を計画し、加えて奈良県内2カ所で展覧会を行い、来場者およびメディア掲載による普及をめざした。新型コロナウイルスの影響のため、東京での催事を中止し、山形県内1カ所での展覧会に変更した。また、小冊子の発行やウェブサイトによる発信を行った。事業を進める中で得た、「NEW TRADITIONALとはなにか」ということを、様々な人と議論し続けることでプロジェクトの意義を深めることにつながった。

2.5.1.「もの与人をめぐるフィールドワーク」

※新型コロナウイルスの感染拡大を考慮して中止した

日 時 2020年3月17日（火）～ 20日（金・祝）
7:30～21:00 / 20日のみ10:00～18:00

会 場 MUJlcom 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス内 COMstudio
（東京都新宿区市谷田町1-4 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス1F）
入場料 無料（ただし談義参加の場合併設カフェにて飲み物1点購入）
協 力 株式会社良品計画、武蔵野美術大学

○展覧会「わたしのニュートラ」

ディレクター：吉田勝信（デザイナー、山形県拠点）

展示内容：

- ・吉田氏がNEW TRADITIONALを題目に選んだ物品。伝統を更新し生活のなかで親しまれる道具やもの
- ・米沢織通と障害のある人の相互の関わりによって生まれた製品を展示
- ・各地の障害のある人×伝統工芸の調査の報告

○トーク「ニュートラ談義」

テーマ=わたしにとってのニュートラ

3月18日（水） 原田祐馬（UMA/design farm）、吉田勝信（吉勝制作所）

3月19日（木） 高野賢二（クラフト工房 La mano）、torinoko（小山裕介、白鳥裕之）、永田宙郷（合同会社ててて協同組合共同代表）

3月20日（金） 多田智美（MUESUM）、水野大二郎（京都工業繊維大学准教授）、吉田勝信（吉勝制作所）

2.5.2. 「もんぺ博inたんぽぽの家アートセンターHANA ギャラリー」

日 時 2020年3月7日(土)～21日(土) 11:00～17:00 *休館：日・月・祝日
 会 場 たんぽぽの家アートセンターHANAギャラリー(奈良市)
 参加者数 200名
 協 力 うなぎの寝床、社会福祉法人わたぼうしの会

展示販売内容：

- ・九州・八女にある、地域の文化から生まれたものを紹介する「うなぎの寝床」の、久留米絣を中心にしたの現代風もんぺ
- ・アートセンターHANA、Good Job!センター香芝との「コラボレーションもんぺ」
- ・アートセンターHANA、Good Job!センターの手仕事から生まれた製品

○トークイベント

日 程 2020年3月7日(土) ※新型コロナウイルスの感染拡大を考慮して中止した
 登壇者 白水高広(うなぎの寝床)



2.5.3. 「東北・奈良・九州の郷土玩具～出張MUTO&津屋崎人形」

日 時 2020年3月7日(土)～21日(土) 11:00～17:00 *休館：日・祝日
 会 場 Good Job!センター香芝(奈良県香芝市)
 参加者数 200名
 協 力 社会福祉法人わたぼうしの会

展示販売内容：

郷土玩具

- ・Good Job!センター香芝が、オープン当初から取り組んできた「張り子」
- ・秋田に店舗を構え、東北の郷土玩具を販売する「MUTO」
- ・福岡で230年以上の歴史をもつユニークな土人形「津屋崎人形」

各地でさまざまな技法で取り組む郷土玩具を一堂に集めて紹介することで、それぞれの共通点や作り方の工夫を知り、障害のある人のものづくりのヒントを探ったり、あたらしい郷土玩具の可能性を考える機会となった。

○トークイベント

日 程 2020年3月7日(土) ※新型コロナウイルスの感染拡大を考慮して中止した
 登壇者 原田翔平(筑前津屋崎人形巧房8代目)、武藤純彦(MUTO)

○郷土玩具にまつわるオンライン講義

本企画展の出展者を講師に迎え、郷土玩具や工房・作家の歴史、使用されている素材や技法などを学ぶための講座を開催した。 ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、インターネットビデオ通話にて、部内者のみ対象とし行った

日時 2020年3月6日(金) 16:30-17:30

講師 武藤純彦・佐藤孔代(MUTO)

日時 2020年3月12日(木) 16:00-17:00

講師 原田翔平(筑前津屋崎人形巧房8代目)



2.5.4. 「ものと人をめぐるフィールドワーク」

※新型コロナウイルスの感染拡大を考慮し東京での「ものと人をめぐるフィールドワーク」を中止するにあたり、それを補う目的で追加実施した

日時 2020年3月20日（金・祝）～26日（木）11:00～18:00

会場 KUGURU（山形市七日町2丁目 とんがりビル1F）

参加者数 300名

協力 社会福祉法人ほのぼのわたしの会社、社会福祉法人さくらんぼ共生会さくらんぼ共生園、株式会社修誠会くらら、米沢緞通・滝沢工房、やまがた障がい者芸術活動推進センター ギャラリーら・ら・ら/しおむすびおかわり

○展覧会「わたしのニュートラ」

ディレクター：吉田勝信（デザイナー、山形県拠点）

展示内容：

- ・吉田氏がNEW TRADITIONALを題目に選んだ物品。伝統を更新し生活のなかで親しまれる道具やもの
- ・米沢緞通と障害のある人の相互の関わりによって生まれた製品
- ・NEW TRADITIONALの本年度の取り組みの概要を紹介する資料

山形を拠点に活動するデザイナー、吉田勝信が考えるNEW TRADITIONALを紹介した。生活、仕事、風習など、豊かだった人間の営みのなかで生まれた「溝」を埋めるデザインやものを紹介。これからの生活や仕事について考えるきっかけをつくることをめざした。米沢緞通で生まれたプロセスでは、障害のある人、職人、デザイナーがフラットな関係で関わり合うことによって、新しい柄や製法を編み出した様子を紹介。他のプロジェクトでもデザインの専門性をもたないクライアント（珈琲豆販売店）たちがデザインに取り組むなど、これまでのものづくりやデザインのプロセスを更新するような取り組みを数多く紹介した。展示会場内では壁面を新たにつくり、入り口の看板や趣旨文も含めたすべてのキャプションをその場で手書きでおこなうなど、「誰でもできる」「失敗を失敗と捉えない」といった吉田が日頃から考えるデザインやものづくりの可能性を体現した展覧会となった。

展示設営＝荒達宏

○トーク「ニュートラ談義」（インターネット配信）

「わたしのニュートラ」をテーマに、今の生活につながるような伝統文化や伝統工芸の可能性や、障害のある人のものづくりへの参加の可能性について議論した。

“tomorrow is today RADIO”とコラボレーションし、ラジオ形式で配信した。

日時 3月22日（日）19:10～20:40

聞き手 原田祐馬（UMA/desing farm）

登壇者 吉田勝信（吉勝制作所）、藤井克英（Good Job!センター香芝）



2.6.報告書やウェブサイトでの発信

調査で得た情報のほか、有識者会議や調査で得た視点をもとに、伝統工芸／障害のある人のものづくりの相互発展を促すことを目的とする。NEW TRADITIONALという着眼点を提示し、考え方や手法をさらに深めることをめざす。報告書は無料配布。ウェブサイトからのダウンロード可能。

2.6.1. 小冊子

- ・発行時期：2020年6月
- ・発行部数：1,000部
- ・無料

NEW TRADITIONALという着眼点を提示し、考え方や手法をさらに深めることをめざす。

2.6.2. ウェブサイト

- ・公開時期：2020年6月

NEW TRADITIONALという着眼点を提示し、考え方や手法をさらに深めることをめざす。

3. 今後に向けた展開と課題

今年度の後半は、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、東京などの都市部で活動を発信したり、議論をする機会を断念することになった。代わりに生まれたのが、実例の実践をしている地域（山形や奈良）で展覧会をすることや、オンラインラジオという形での発信だった。展覧会では、当初予定していた東京であれば来れなかったであろう、地域の障害のある人たちが多数来場したり、オンラインでの議論は地域を超えて活動の意義を届けることができた。今後、NEW TRADITIONALを続けていくために、展開の可能性と課題をまとめる。

- ・実例の検証や今後の展開に向けての議論を続けること

プロジェクトの立ち上げから早急に福祉の現場と伝統工芸の場をつなげるのではなく、リサーチや議論を重ねた。その結果、「私のニュートラ」といった、個人の視点でNEW TRADITIONALについて考え発信する展覧会が実現した。その反面、実例づくりについては実験的な側面が多く、ものとしての質や、販売方法、継続した製造のあり方なども含めた検証が必要である。今年度の成果をもとに、さらに今後深めていくことをめざす。

- ・多くの人たちと価値を共有すること

今回の取り組みで、ものをつくるだけでなく、ものをつかう場をつくることによって、新しい生活文化を提案することをめざし、展覧会や茶会を開催した。特に茶会では、障害のある人が茶や菓子で参加者をもてなすこと、伝統や様式にとらわれることなく、交流したり場をたのしむ文化をつくることを提案できた。こういった取り組みは少人数で丁寧な交流できる反面、多くの人たちと価値を共有することができない。各地で実施をしていく方法を考えたり、その場を経験できない人たちにさまざまな媒体を使って、実践や考え方を伝えることが必要と感じている。

- ・つくり手たちの交流の機会をより多くつくること

実例づくりやワークショップを実施することで、障害福祉や伝統工芸の垣根を超えてつくり手たちが交流できる機会を設けた。交流によって技法やものの背景を交換することで、相互にもものづくりのヒントを得たり、新しい伝統づくりの可能性を発見した。特筆したいのは福岡の「津屋崎人形」と奈良・香芝市の「Good Dog」のベースと塗装の交換。お互いに塗装前のベースを交換し、日頃の絵付け方法を施すというものだったが、それによってつくり手が自分たちがつくっているものの新しい側面に気付くことができた。また、山形で実施した米沢緞通のものづくりは、緞通の職人が障害のある人の作品を忠実にトレースしたり、障害のある人が緞通の技法を使って製品作りにチャレンジすることもできた。このようにものの交流はできたが、人の交流までができなかったことが課題である。実際にその地域を歩き来して得られることがたくさんある。今後、交流の機会をどう増やすかを、方法を含めて検討したい。

最後に

新型コロナウイルスの影響により、今後、私たちの生活や産業全体が大きな転換を迫られることになる。そのなかで本プロジェクトでできることはなにか。社会の変化の先を見ながら、議論と実践と提案を継続していく。

4. メディア掲載履歴

- ・ウェブメディア『しゃかいか!』 2019年10月9日付、2020年3月16日付
- ・ウェブメディア『real local 山形』 2020年3月19日付
- ・朝日新聞 2020年3月15日付朝刊奈良版
- ・奈良新聞 2020年3月15日付

27 奈良 13版 2020年(令和2年)3月15日(日) 享月 日 第11 頁

奈良

奈良総局 〒630-8536 奈良市三條大路1-9-17 ☎ 0742(36)6331 nara@asahi.com
 生駒支局 ☎ 0743(75)3091
 橿原支局 ☎ 0744(22)2082
 吉野支局 ☎ 0747(52)2515
 大和高田支局 ☎ 0745(52)2047

購読のお申し込み
配達お問い合わせ
0120-33-0843
(7:00~21:00)

購読・配達のご用は
奈良 (23)2650
(10:00~18:00
=日・祝除く)
(22)6780

広告のご用は
奈良 (24)0376
折り込みは
奈良 (61)3015

刺繍やプリント 個性派もんぺ

奈良 障害のある人が加工



奈良市六条西3丁目の「たんぽぽの家アートセンターHANAギャラリー」で、障害者が加工したもんぺを販売する「もんぺ博」が開かれている。福岡県の伝統工芸品・久留米紬の生地を使った、カラフルなもんぺが並んでいる。障害者の芸術活動を支援する一般財団法人「たんぽぽの家」と、久留米紬の商

品開発などを手がけるアンテナショップ「うなぎの寝床」(福岡県八女市)のコラボ。就労支援施設の利用者約20人がデザインを考え、刺繍やプリントをしてオリジナルの作品を完成させた。

水田篤紀さん(27)は好きな漢字をもんぺに手縫いした。難しい漢字が好き。(それぞれの作品の)個性を感じてほしい」。スタッフの岡部太郎さん(40)は「伝統工芸に障害のある人の創造性を組み合わせたい」と、また違う魅力が生まれるのを見てほしい」と話す。

もんぺは1本1万6500円(税込)。通常のもんぺも販売している。21日まで(15、16、20日は休み)。問い合わせは同法人(0742・43・7055)。(桜井健幸)

障害者が加工したコラボもんぺを持つスタッフ=奈良市六条西3丁目

発行日 2020年3月31日

発行元 一般財団法人たんぽぽの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4

Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501 E-mail tanpopo@popo.or.jp

URL <http://tanpoponoye.org>

編集 一般財団法人たんぽぽの家(岡部太郎、後安美紀、酒井靖、中島香織、那木萌美)

協力 Good Job! センター香芝(中塚翔子、藤井克英、三輪竜郎、森下静香)

撮影 衣笠名津美(p34、37、42、43)、三浦晴子(p36)、志鎌康平(p45)